ラテンアメリカ
随想

ラテンアメリカのサッカー

山田 彰（ラテンアメリカ協会 常務理事）

アルゼンチンのワールドカップ優勝

ラテンアメリカのほとんどの国で、サッカーは圧倒的に人気No.1の国民的スポーツである。サッカーは、ラテンアメリカの人々との会話で欠かせない話題であり、仲良くなるための共通言語と言ってもよい。

さて、2022年FIFAワールドカップ（以下「W杯」）カタール大会は、アルゼンチンの優勝で幕を閉じた。ラテンアメリカ勢の優勝は、20年ぶりである。

これまでW杯の優勝経験国は8つだけ。北中南米で開催されたW杯では、2014年ブラジル大会のドイツを除いて、毎回南米のチームが優勝し、欧州で開催された時は、1958年のスウェーデン大会のブラジル以外は、毎回欧州勢が優勝している。どちらでもない日韓大会ではブラジル、南アフリカではスペインが優勝した。この優勝国の偏りは、単なるジンクスとは片づけられず、有形無形の一種のホームアドバンテージがあると見た方がよかろう。カタール大会の各スタジアムにはある種のアンチ・ヨーロッパの雰囲気が感じられたが、さらに、毎試合アルゼンチンのサポーターが大勢詰めかけて、応援で相手国を圧倒していたのも印象的であった。

アルゼンチンは、初戦サウジアラビアにまさかの敗戦を喫した後、チームが引き締まり、「後がない必死感」が出てきた。メッシは、試合ごとに調子を上げ、W杯の名場面として残るような超絶技巧のスルーパス（オランダ戦）、鮮やかなドリブル（クロアチア戦）など、ゴールだけではないスーパープレーを見せた。

フランスとの決勝戦は、人々の記憶にも記録にも残る一戦だったが、世界中の多くのサッカー・ファンが（アルゼンチンに、というより）メッシにW杯を取らせたいと願っていたのではなかろうか。PK戦になった時、その思いがあって勝利の女神がメッシのアルゼンチンを味方した、そんな感覚にとらわれた。日本でも、7割以上がアルゼンチンを応援していたというアンケート結果があった。

大会後、NHKで『メッシと私』というTV番組が作られ、世界中のファンがメッシに自分の人生を投影させながら応援している姿が放映された。同時代に生きて、この選手のプレーを見る機会があって良かったと思わせるスポーツ選手はめったにいないが、世界中の期待を集め、それに応えたメッシこそまさにそんなプレーヤーであった。

自国の優勝で、アルゼンチンはどれくらい盛り上がったか？ 筆者は1986年W杯でアルゼンチンが優勝した時に現地にいて、その興奮を共有体験した。現地からの映像、報道を見る限り、今回の熱狂は86年のそれを上回っていたようだ。400万人ものサポーターが集まった優勝パレードは、多くの死傷者が出て、混乱のうちに中断された。W杯優勝で経済が良くなり、政権批判が収まるか？と聞かれることがあるが、ラテンアメリカとはいえ、優勝の喜びは生活面の不満を何か月も抑えていられるものではない。

ブラジル・サッカーと日本

日本サッカーの発展はブラジルに多くを負っている。古くは与那城ジョージ、セルジオ越後といった日系人選手が日本でプレーし、格の違う本場のプレーを披露した。Jリーグ発足後は、ジーコ、ビスマルク、ドゥンガなど世界的なプレーヤーも来日し、彼らのプレーを通じて日本サッカーは多くを学んできた。現在も多くのブラジル人選手、監督がJリーグで活躍している。

2014年8月、安倍総理の中南米歴訪の際には、日本サッカー協会、梅田駐ブラジル大使らが企画してブラジリアで「サッカー感謝の集い」を開催し、日本サッカーの発展に大きく貢献した8名の関係者（アルシンド氏、オスカー氏、サンパイオ氏、ジーコ氏、セルジオ越後氏、ドゥンガ氏、ビスマルク氏、マリーニョ氏）が招待された。総理はブラジル人の日本サッカーへの貢献に対して感謝の意を表明、ジーコと安倍総理がパス交換をしたというこのイベントは、両国サッカー関係者の間で今でも

写真１：「サッカー感謝の集い」（筆者提供、以下同様）

語り草となっている。

2018年、ヌネス外務大臣は日本人移住110周年を祝う『フォーリャ』紙への寄稿の中で「日本人はブラジルに柔道を教え、ブラジル人は日本にサッカーを教えた」と書いている。

日本でプレーした選手の多くは、日本を愛し、今でも日本との絆を持ち続けている。ジーコは選手、日本代表監督を務めた後も鹿島アントラーズの役職に就任するなど、日本との深い絆を保ち、在ブラジル日本大使館作成のナショナルデー記念動画にメッセージを送ってくれたりした。94年W杯優勝チームのキャプテンのドゥンガは、その後ジュビロ磐田でプレーしたが、現在はポルトアレグレ在住で日本関係の行事に出席したりしており、筆者に日本でプレーしたころの思い出を懐かしんで語ってくれた。ブラジル生まれの元日本代表、三都主はパラナ州マリンガ市に在住で、サッカー学校を開くなど地元の名士である。マリンガ市と姉妹都市の兵庫県加古川市の親善大使の肩書きも持っており、両国のかけ橋として活躍している。

アギーレ監督と日本

ハビエル・アギーレも忘れ難き人物だ。2014年夏にアギーレ氏は日本代表の監督に就任した。その直後にメキシコを訪問した安倍総理に対して、ペニャ・ニエト大統領は「日本はメキシコを信頼してくれているが、代表監督にもメキシコのアギーレを選んでその信頼を表現してくれた」と述べ、首脳会談の話題にもなった。

しかし、アギーレ監督は、就任間もなくスペインでの八百長疑惑に巻き込まれ、代表監督退任を余儀なくされた。筆者は退任を残念に思い、また、彼が日本をどう思っていたのか気になっていた。後に、メキシコの日本大使公邸にアギーレ氏を招待する機会があり、日本での経験について聞いてみた。彼は、日本滞在、日本代表の指導に良い思い出を持っており、退任になった経緯についても「自分への八百長疑惑は全く事実無根だが、あのような形で報道されれば、日本の文化においては監督を続けさせられない、というのは理解できた」と述べて、契約解除を恨みに感じているようなことはなかった。「機会があれば、日本のクラブチームの監督になるのもいい。実際、オファーも一、二あった」と話していたので、将来日本で指揮を執る姿が見られるかもしれない。

ラテンアメリカの日本選手

筆者がメキシコ在任中一番驚いたニュースは、2017年の本田圭佑選手のパチューカ入団であった。筆者はパチューカまで本田選手に会いに行ったが、新しい土地で常に前向きで、新たなことを貪欲に吸収しようとする姿勢が印象的だった。本田選手はパチューカでかなりの活躍を見せ、ロシアW杯の代表メンバーにも選ばれた。その後、豪州、オランダのチームを経て、2020年にはブラジル

写真２：2019年コパ・アメリカにてドゥンガと

写真３：アギーレ監督と筆者

写真４：本田選手と筆者

のボタフォゴに入団した。当時ブラジルにいた筆者はまた本田選手に会えると楽しみにしていたが、間もなくコロナ禍が始まり、試合は無観客になり、再会の機会はなく、また彼はボタフォゴでは、さしたる成績を収められず、シーズン途中での退団となった。

これまで、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイなどで、大物と言われる選手も含め多くの日本人選手が在籍したが、本当に活躍したと言える選手は少ない。日本選手が海外を目指す時に、ラテンアメリカはプレー環境、生活環境が厳しいため、欧州に向かう選手の方が圧倒的に多い。女子では、現在ジェフ市原に所属する藤尾きらら選手がブラジル・レシフェで日本人女子プロ選手第一号としてプレーしていたが、まだ後に続く選手はいないようだ。

ラテンアメリカのサッカー文化

サッカーはラテンアメリカの人との共通言語と書いたが、みんながみんな、サッカー・ファンというわけでは決してない。ロシアW杯やコパ・アメリカの時は、セレソン（代表）の情報にさして関心を持っていないブラジル人もかなりいた。ブラジル人は、ブラジルW杯での7－1の対ドイツ敗戦以来、セレソンへの愛情が薄れたのだという人もいる。

日本では、W杯で決勝トーナメントに進出すれば成功であり、帰国してから「感動をありがとう」と言われるが、ブラジルとアルゼンチンでは、優勝しないとだめのようだ。カタール大会でベスト8止まりに終わったブラジル代表は帰国後散々に批判されている。そこには厳しい批判こそがチームを強くするというサッカー強国のメンタリティがある。ただ、ラテンアメリカでも他の国では、ベスト8に進めれば大成功であり、例えばコスタリカは2014年大会のベスト8で国中が沸き立った。

ラテンアメリカでは、国代表への愛より地元チーム愛の方がはるかに強いと言われるが、このことは世界の多くの国で当てはまり、代表に注目が集まりがちな日本は例外的だ。ラテンアメリカやヨーロッパでは、サッカーのクラブは単なるスポーツ球団という枠を超えたいわば社会的存在である。子供のためのスポーツ教室を開いたり、社会貢献活動を行ったりするし、クラブの施設は町のアイコンとなる。

一方、サッカー・メディア、特に紙媒体は意外に発達していない。サッカー専門雑誌は少なく、情報量も少ない。メジャーなサッカー専門誌だけでも5～6誌あり、日本だけでなくヨーロッパの選手名鑑まで詳細なものが3種類くらい出版される日本とは大きく異なる。テレビ番組やカフェでの様子からすると、ラテンアメリカの人はサッカーについて活字はあまり読まず、おしゃべりするか、さもなければ自分でプレーするのが好きなようだ。大人も子供も、グラウンド、浜辺、街角でカジュアルにボールを蹴って楽しむ姿は日常的だ。

ラテンアメリカに住む日本人は、現地の人と仲良くなるためにも在住国のサッカーの歴史、有名選手、日本との対戦歴などをちょっと調べておいて、損はない。

（注：ラテンアメリカ人にとっては、当然「フットボール（fútbol, futebol）」と呼ぶべきスポーツだが、本稿では「サッカー」に統一する。）

（やまだ あきら　ラテンアメリカ協会常務理事、外務省参与）